

『40年前の学校と』

教員の多忙さと長時間労働の深刻さが、世の中全般に認識されるようになりました。そして、国の方針の下「働き方改革」が進行中です。なぜそんなにも教員は忙しいのか。教員の状況について、過去と現在で一度は比べておいた方がいいなと思っていました。そこで、自分なりに比べたいと思ったのが、私が新卒1年目の時の学校の状況と今の学校の状況です。あくまで私の印象や残っている記憶という視点での記述ですから、極めて主観的なものです。

当時の私の仕事は、3年2組（児童33名）の担任。新卒1年目からの学級担任は、当時は極々当たり前のことでした。加配という制度もなかったので（私が知らなかったかもしれませんが）、全ての授業を一人でやりました。

時々、子ども同士でのケンカはありましたが、深刻な問題はなかったと思います。何かトラブルがあっても、上司へは口頭報告で済みました（今は、記録や報告書が求められます）。また、保護者からの苦情や理不尽な要望もありませんでした。むしろ温かく見守り応援してくれました。ですから、優先すべき私の仕事は、「学級の子供達との人間関係づくり」と「より良い授業づくり」でした。ただ、この2つは、教員をやっている間は、永遠の課題でありますし、今現在も最優先事項だと思います。

「若い教師は、まずは、子どもと遊べ！」と上司や先輩からアドバイスをいただきました。休みは、体育館や前庭で、子ども達と鬼ごっこ（手つなぎ鬼が多かったです）をよくしました。子どもと一緒に体を動かし、汗をかきました。私も子ども達も、次の授業にすっきりとした気分で臨みました。今、休み時間に子どもと遊んでいるでしょうか？安全確保のために交代で見守りを行っている学校はあるかもしれませんが、おそらく提出物やノートの点検等に費やされているのではと推測します。

校務分掌は保健体育部（若い男性教諭ということで）でした。責任を持って何かをしたという記憶はありません。任せるのはまだ早いと評価されていたと思います。私も、どのような仕事なのか良く分かっていなかったのも、受け身的に部長役の先生からの指示を待っていました。

その学校は、管内の道徳教育研究の指定を受けていました。その年の秋には公開研究会を行うことになっていました。研究会に向けての会議がありましたが、よくわからない言葉がたくさんあり、何を質問していいのかもわからなかったのも黙っていました。そんな私に、「分科会は2つでいいですか？」と訊かれ、分科会というものが何であるかもわかっていないのに「いいと思います」と答えてしまいました。知ったかぶりをしてしまったのです。本当に恥ずかしい行爲でした。今でも、このことを思い出すと、赤面してしまいます。

この研究会に向けて私ができることは、本番に向けての準備の一つである「研究授業」をすることぐらいでした。どの学年も行うことになっていましたので、1組の先生と話し合い、私がやることになりました。研究会まで約2週間というタイミングで研究部長の先生から「研究発表で使うOHPシートを作成してくれないか」と頼まれました。この時は嬉しかったです（自分も少しは貢献している感じがしたので）。

町教育研究会では理科サークルに所属していました。サークル部長さんから「研究授業、やらないかい？」と勧められました。「磁石のはたらき」の学習で、「磁石が自由に動ける状態のとき、どの磁石もN極は北を指す」場面を公開しました。やっておもしろかったし、授業づくりをする上でいろいろとためになったなと思っています。

1年目は、研究授業を2つやりました。どちらも、準備にかなりの時間をかけました。都市部

の書店で専門書を買ひ、授業のヒントがないか調べました。授業の構想を練るのは、概ね夜、下宿の自室でやりました。じっくりと思いを巡らせ、ちょっとずつ授業のイメージが作られていくことが楽しかったです。

ほぼ毎日、夕方頃から職員体育の時間がありました。1年目はバドミントン（ダブルス）が主でした（次第に卓球も盛んになりました）。先輩の先生方は、皆さん自分のラケットを持っていました。私も早々にラケットを購入。当初は、プレーの基本もわからず、無駄な動きが多くて、先輩達に歯が立ちませんでした。

やっていく中で、少しずつコツがわかってきました。先輩達と互角に勝負できる状況も出てくるとおもしろくなり、職員体育の時間が楽しみでした。ある程度の学級事務は済ませておきました。ノートの点検等は持ち帰ってやるが多かったです。

大いに声を出し、笑い、ガッツポーズして喜び、いっぱい汗をかきました。今思うと、この学校での7年間は、教員生活の中で一番運動していました。とても健康的な生活を送っていたなと思っています。今は、どこの学校も、職員体育の時間はとれていないのではと推測します。

私の教員1年目は、以前のコラムでも触れましたが、出だしてつまずき、学級経営に自信をなくし、「教師、やっていけないかも」と悩み苦しみ体調も崩しました。運よく、夏休み明けから、子ども達との関係が好転し、その後はがむしゃらに頑張りましたが、時間と気持ちの余裕はありませんでした。何かに挑戦しようというやる気も持っていたと思います。

さて、「余裕がない!」と感じ始めたのは、個人的な印象では、完全学校5日制が導入された頃からかなと思います。それまで、学校は土曜日も午前中は授業がありましたが、平成4年から段階的に土曜日が休みになっていきました。週に2日休みがあることは喜ばしいことではありましたが、何となく平日の5日間は、「バタバタ」し始めた感覚があります。

そして、教科書のない授業「総合的な学習の時間」が始まりました。ねらいや取り扱う大まかな内容等は示されていましたが、教員が学習素材を発掘し、ゼロから学習活動を構築していかなければなりませんでした。その準備は、とても大変だったと思います。いわゆる「総合」という教育活動には、「新しい時代を生きぬくための力の育成」というねらい（私の捉えです）があり、やりようによってはとても魅力のあるものになると思っています。また、教員の授業に対する考え方の変革にもつながると押さえていますが、もっと準備のための時間が確保されていればいいなと思っていました。いい準備によりいい活動が期待できるとしています。

全国的に、いじめの問題や不登校は喫緊の課題となっていました。これらを解決するための対応は、いわゆる教育課程以外の場面で取り組むことになりますので、休み時間とか放課後に行うことになります。時には夜遅くまで学校に残って、対策会議や保護者の対応がなされます。また、未然防止のためには、普段から魅力ある教育活動の展開が求められています。

「保護者対応」は教員の仕事の一つになっていますが、困難さが増してきています。教員の中には、これを得意とする方もいれば、苦手とする方もいます。苦手な方にとっては、大変なストレスとなり、誰にも相談できずに一人で抱え込んでしまえば、精神的に追い込まれていきます。

なお、子どもとの関わりや指導においても難しさが増しています。

この40年で、世の中が大きく変わりました。コンピュータやインターネットの普及による「教育の情報化」、国際化の進展による「小学校英語」、特殊教育から「特別支援教育」への転換、「道徳の教科化」、「個性や多様性の重視」、「不審者対応」や「通学路の安全確保」等々、社会の変化や重大事件をきっかけに、その解決が学校教育に求められ、結果、学校が担う役割は減ることなくどんどん増えました。

目の前の子どもの成長に喜びややりがいを感じ、それを心の支えに、つま先立ちのような状態でかつ献身的に教員は頑張っているのではと想像しています。さらに負荷がかかればバランスを崩し転んでしまう人や心が折れてしまう人が出てくることを危惧しています。

もう少し気持ちに余裕を持ち、じっくりと仕事ができればいいなと思っています。